

保育園安全だより

—事故報告よ—

令和6年4月～6月分



新年度がスタートし、子どもたちも新しい環境に慣れ、遊びも活動範囲が広がってきている頃ではないでしょうか。この時期、保育園では水遊び・プール遊びを楽しむ姿も多くみられますが、同時に大きな事故につながるおそれのある活動でもあります。どのような活動においても、これまでの保育の中のヒヤリハットを見直し、リスクを職場全体で共有し、安全な環境を整えましょう。

令和6年度 事故報告書集計（4～6月）												
	園内								園外			計
	保育室	ホール	廊下	玄関	トイレ	テラス	園庭	その他	道路	公園	その他	
0歳児	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	9
1歳児	35	0	1	0	0	5	2	2	0	1	0	46
2歳児	19	10	0	1	0	5	18	1	0	0	0	54
3歳児	25	5	0	0	0	6	14	1	0	0	0	51
4歳児	13	2	0	0	0	1	14	1	0	1	0	32
5歳児	10	7	1	0	0	2	21	1	0	3	3	48
合計	110	24	2	1	0	19	69	6	0	5	4	240



=安全保育 リスクを少なくするために=

4月当初は、小さなトラブルからひっかき傷につながってしまった事故報告が多く上がっていましたが、5月に入ると転倒やバランスを崩して顔面挫創や歯芽打撲につながってしまった事故が増えてきました。その原因の多くは、子どもの動き（バランスを崩す・手が出なかった）が予測できなかったことや、すぐに補助できる場所に職員がいなかったことが原因として挙げられています。事故を防ぐためには、自園の課題や危険な場所等を再確認する、クラスだけでなく、その場にいる職員全体で児の特性をも含め共有する、やむを得ずその場を離れる時には、声を掛け合うことが重要となります。園全体でリスクを見直し、怪我の予防につなげましょう。

【熱中症の予防】

昨年は記録的な暑さが続き、熱中症対策も含めて園児の体調管理にいつも以上に気を遣われた事と思います。今年もこれからプール遊びも含め、戸外での遊びが充実する季節です。気温や湿度の定期的な確認・こまめな水分補給・子どもたちの体調管理などで熱中症を予防しましょう。

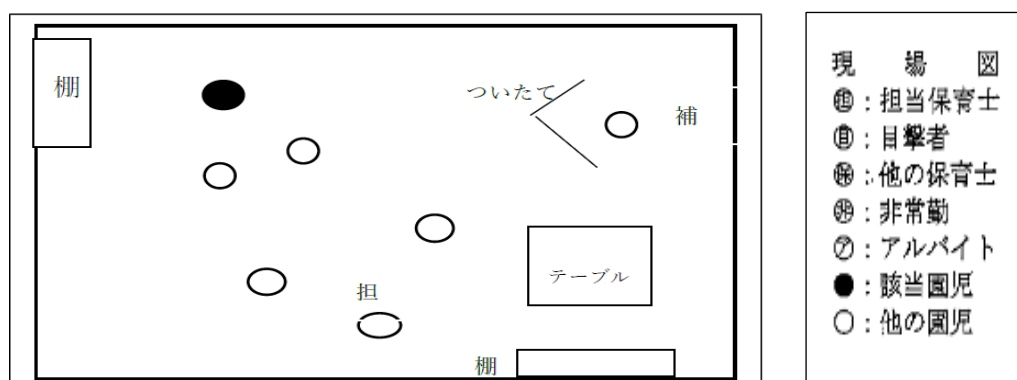
【救急車要請】

【事例1】 1歳児 発生時間 10時38分

《発生状況》

室内で遊んでいた。食事の時間が近づいていたため、遊んでいたおもちゃを片付け始めた。ある程度片付いたため非常勤職員に子どもたちのおむつ替えを順番に頼んでいた。担当保育士は全体を見ながら遊ぶ子どもたちについていた。1つだけ残っていた緑色のボールに本児が近づき、足元を取られて転倒。担当保育士が本児に近づき声をかけながら抱き上げると、焦点が合わず徐々に顔色が悪くなる本児の姿があり、他の職員の応援を呼ぶ。転倒後、嘔吐や痙攣の症状はなかったが、母と連絡を取っている間に眠ってしまったため、救急車を要請した。

《現場図》



《原因・問題点》

- ・本児が転倒する前に隣の部屋で嘔吐があり、消毒のため部屋を分けていつもより多めの人数が室内にいた。
- ・ボールで引き続き遊んでいる児がいることは把握していたが、他児と関わり目を離してしまった。

《その後の改善策》

- ・大人の動きが多くなる時間だったが、おむつ替え等目が離れることが予想される時には、応援を呼んだり、落ち着いた環境の中で行った方がよかった。
- ・床に玩具が散らかっていると踏んで転倒につながる。その都度環境を見直していく。

この事例は、お子さんが転倒して間もなく眠ってしまった、というものでした。頭部を打撲した際は、脳震盪を起こしている可能性があるため、その場から離れず、お子さんを動かさないようにし、直ぐに園長、副園長、看護師に報告をすることが重要です。お子さんの状況を痙攣チェック表に記入して、救急車が到着するのを待ちましょう。遊びから食事の準備をするなど生活の切り替わりの際は、大人も子どもも動く範囲が広がります。一人ひとりのお子さんから目が離れることがないようにする為の職員同士の連携や保育体制を考えておきましょう。

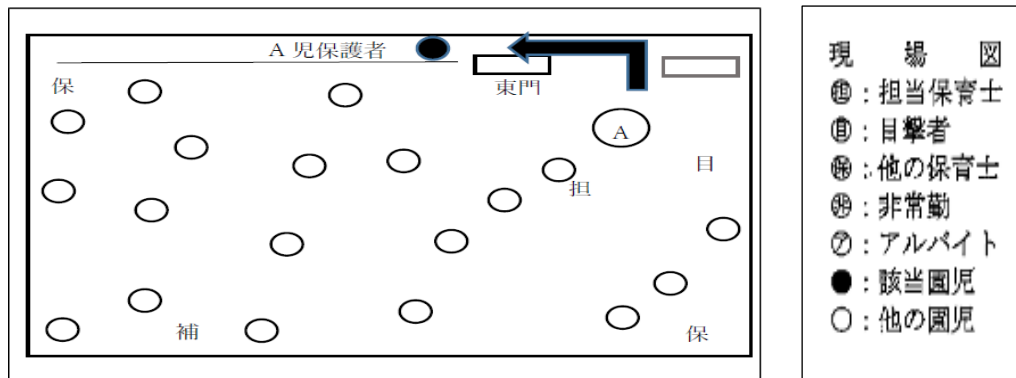
【送迎時に起きた門扉からの抜け出し】

【事例2】 4歳児 発生時間 16時15分

《発生状況》

夕方、3・4・5歳が園庭で遊んでいた。4歳児クラスの保護者がお迎えに来てA児とともに東門から降園しようとしていた。保護者はA児がくるのを待つのに、東門を開けたままにしてあった。担当保育士が該当園児についていたが、片付けの時間となり他児に片付けの声掛けをしたり、他児の対応をした際に該当園児から視線を逸らしてしまった。その際開いていた東門から該当園児が出て、園外に走り出してしまう。A児保護者が気づき、その後気づいた保育士も追いかけて保護する。

《現場図》



《原因・問題点》

- ・傍についていた担当保育士が部屋にいた他児に声掛けしようとして、その場から離れてしまった。
- ・お迎えに来ていた保護者も少しの間、門を開けている時間があつた。

《その後の改善策》

- ・該当児は配慮を必要とするお子さんのため傍に職員がついていたが、離れる際には必ず声を掛け合い、全体で見ていくことを再確認した。
- ・保育士・会計年度（補助員）の人数と体制を確認する。
- ・子どもが遊んでいる時間帯に、送迎で開閉する門扉が2か所あり、リスクが高いと考え、使用する門扉を1か所にしていくよう保護者をお願いする。
- ・飛び出しの危険がある為、門の開閉に気を付けてもらえるよう伝える。

おやつ後に園庭に出て遊び、保護者の迎えを待つ時間帯の出来事でした。今回は職員が、そのお子さんの特性を踏まえて傍で見守っていたのですが、片付けのタイミングでその場を離れてしまったことで“門扉からの抜け出し”が発生しました。片付けのタイミングで職員みんなが、片付け体制をとっていなかったのでしょうか？

幼児クラスが大勢園庭に出た時は、職員はどこを責任もって見ていくのか、次に行動する際は、誰に声をかければよかったのかなど職員間で話し合っていく事が大切になります。特性がある子は、先生が傍で見守っていたことで落ち着いて過ごせることが予想されます。片付けもそのお子さんと共に行動する、他児への声掛けは他職員に依頼するなどの連携体制などしっかり園内で話し合っていきましょう。また門の開閉について、具体的に何に気を付けたらよいのか、職員間で確認しましょう。



【魚の骨が刺さり耳鼻科の受診】

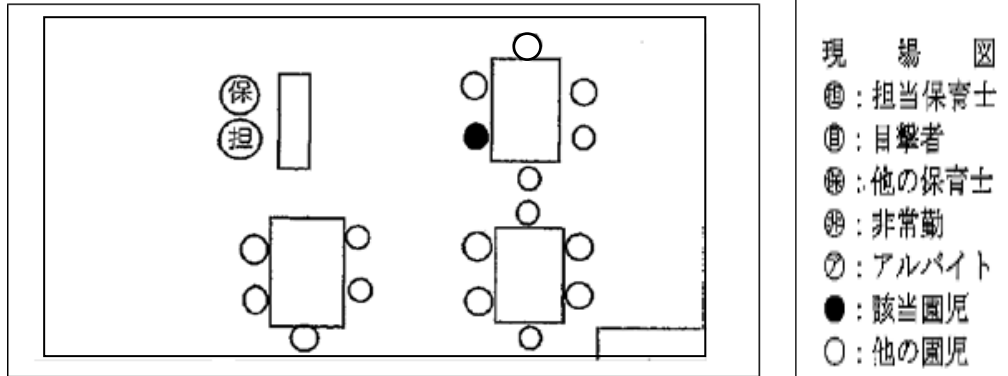
【事例3】

【診断名】 咽頭遺物

【発生日時】 令和6年1月10日（水）12時 5分頃

【クラス・性別】 5歳児クラス（女児）

【現場図】 5歳児保育室



【発生状況】

5歳児室にて、昼食を食べていた。（メニュー：ごはん、さばのカレー焼き、おひたし、煮豆、みそ汁）食べ始めて10分ほどたった頃、本児より「なんか舌がピリピリする感じがある」と申告がある。保育士が麦茶を飲むように促し、麦茶を飲む。「まだ痛い、魚の骨かもしれない」とのこと。ごはんを一口食べてみるが痛みは変わらず。右ほほと首間辺りを指して「ここが痛い」と訴えたため、食後に看護師に見てもらう。

【応急救護処置の内容】

麦茶を飲む、うがいをする。咽頭部を確認するもはっきりしたものは確認できなかった。

【原因】

昼食のメニューが魚であることは伝えたが、再度「骨に気を付けて。」「食べる時確認して。」という声かけはしなかった。

【その後の改善点】

食材の特徴や気を付けることをその都度知らせ、意識できるようにしていく。楽しい雰囲気は大切にしつつ、姿勢や食べ方、会話が盛り上がることによる誤飲のないよう、注意して見守っていく。

【園長意見】

年明けで久しぶりの給食だったこともあり、全体的に様々な配慮をする必要があった。魚のメニューの時には、骨があるかもしれないこと、よくかんで食べる必要があることなど子どもと確認していかれるよう、その都度、意識して声をかけていくようにする。



～看護師のコメント～

喉に魚の骨が刺さった事例です。この例ではピリピリという感じという申告で痛みの訴えがありましたが、訴えがない場合もあります。違和感を訴えた時は、まずうがいをさせて耳鼻科を受診しましょう。

また、新しい環境での食事の際には、窒息などの危険性もあります。環境を整え、細かい観察と情報共有を行い、その後の経過をみていくことが大切

です。

保健マニュアルより抜粋

誤飲し、のどに異物がつかえた

①急に激しい咳を繰り返したり、嘔声(かすれ声)になった時は、気道に異物が入ったことが疑われる

②気道内異物除去を行っても、異物が出てこない時や、子どもの状態が悪い時は、同時に救急車を手配する

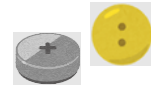
※誤飲のおそれがあるもの(口に入ってしまうような小さい玩具以外で)

- ・洋服やぬいぐるみなどについているボタン
- ・玩具のはずれた部品や壊れた破片など

*子どもは食べるつもりはなくても口に入れてみたりすることがある。

特に3歳くらいまでは口に入れて性質を知ろうとするので、常に環境整備を心がける。口にした時は飲み込まないよう配慮しつつ、口の中をすぐに確認して取り出す

*ボタン電池(リチウム電池)は電気分解によりできたアルカリ性の液で容易に腸管の壁を傷つける



【幼児期から学童期に唐突に起こる環軸椎回旋位固定】

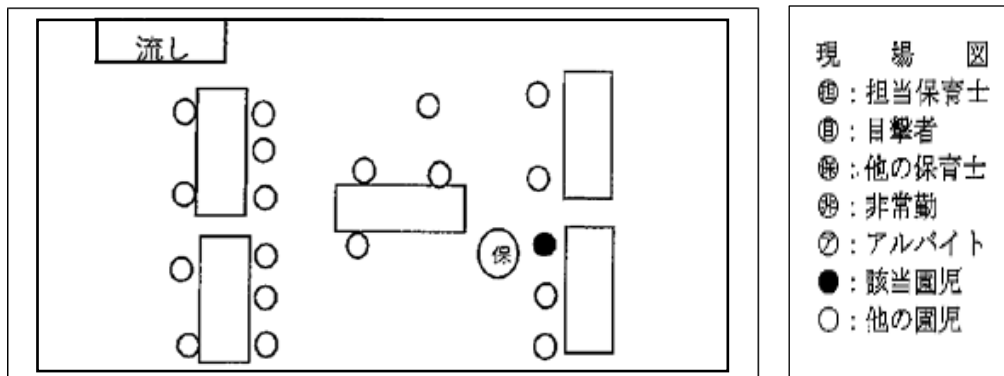
【事例4】

[診断名] 環軸椎回旋位固定

[発生日時] 令和6年3月11日(月) 11時00分頃

[クラス・性別] 4歳児クラス 男児

[現場図] 4歳児保育室



【発生状況】

室内で着替えをする。本児の横に保育士が付き、全体の着替えを見守る。本児が服を着替え終わり、汚れ物袋を右手に持ち、右足を軸に振り返った後に顔を歪める。理由を尋ねると、首の右側を押さえ「痛い」と話す。



[応急救護処置の内容]

無理に首を動かすことのないように伝える。

[原因・問題点]

不明

医師より特に原因なく起こる場合、捻ったり衝撃を受けた後に起こる場合、喉周辺の炎症が起こった後や中耳炎等が契機にでる場合もあり、原因は特定できないとの話あり。

[その後の改善点]

幼児期から学童期に、比較的唐突に首が痛くなり前をむけなくなる症状<環軸椎回旋位固定>が起こりうることを周知する。

上記の疑いがある場合は、受診し医師の診断を仰ぐ。

[園長意見]

初めて聞く受傷名と原因が特定できずこのような症状が出ることもあると知った。保育の中で少しでも異常があったら、保護者と情報共有しながらはやめに受診していくことが大切であることを再確認した。

～看護師のコメント～

着替え中に振り返った際に首を痛めた事例です。何か衝撃を受けたわけではない状況でしたが、異常を察知し受診となったケースでした。

今回の事例は、原因を特定されていませんが、医師より衝撃だけではなく、喉や耳の炎症によるものもあるということでした。日常の保育の中で、些細なことから首を痛めてしまう可能性がある、ということをお覚えておきましょう。

【同日に2か所の歯科受診をした事例】

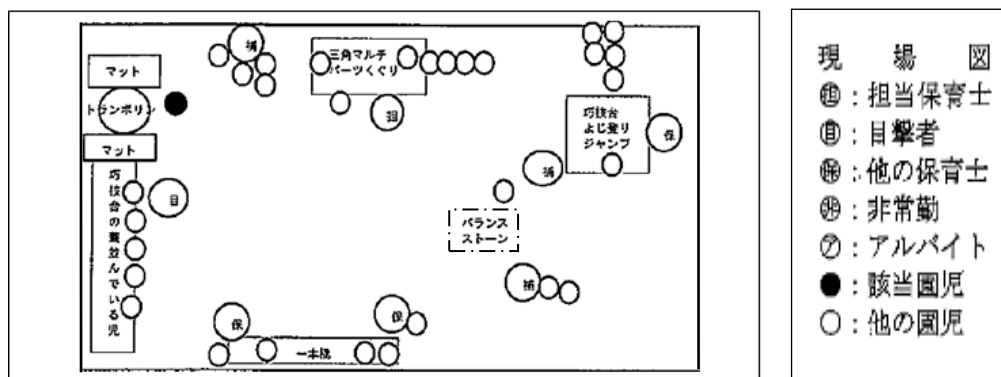
【事例5】

[診断名] 外傷性埋入

[発生日時] 令和6年3月8日（金）9時45分頃

[クラス・性別] 2歳児クラス（男児）

[現場図] ホール



[発生状況]

9：15頃からホールで1. 2歳児クラスが、トランポリン・一本橋・L字マルチパーツ・巧技台・バランスストーンで遊び始める。トランポリン

には会計年度職員がつき、10回ずつ跳び一人ずつ順番に遊んでいた。該当園児も跳んだあと、会計年度職員に促され一度降りる。巧技台の蓋に座って並んでいた児の順が入れ替わっていたため、会計年度職員が並んでいた児の対応に離れたときに、該当園児が再度トランポリンに登り、ジャンプして降りようとしたところ、上履きの先がトランポリンの外枠に引っ掛かり、会計年度職員が立っていたマットが敷いていないところに墜落し歯を床にぶつける。

*トランポリンの高さ19cm・直径90cm・真ん中部分55cm

<受診後の経過>

園指定の歯科を受診後に保護者が病院に到着。職員が保護者に受診内容を報告した。該当園児の不安が強いことから、保護者は、児をそのまま連れて帰る。帰宅後に保護者から園に電話連絡があり、受傷状況の質問があり回答した。保護者は、診察内容と処置に納得ができない様子で、別の歯科を受診したいとの申し出があり、園の職員も同行した。受診の結果は最初に行った歯科医の見解と同じであった。

[応急救護処置の内容]

出血部の圧迫止血

[原因・問題点]

- ①マットがトランポリンのまわり全面に敷いていなかった。他の保育士が設定後、ホール倉庫内にあるマットを足したが、足りておらず、1歳児室等にあるマットを持ってくるなど、危険予測とそれにおける安全管理が足りなかった。
- ②トランポリンについていた会計年度職員が並ぶところにも気を配らなければいけない状況であり、職員の配置が適切でなかった。

[その後の改善点]

- ①危険予測を高め、全面にマットを敷く等安全に遊べるよう設定を行っていく。ホールで遊ぶのにマットの必要な枚数が足りていなかったため、適切な枚数を用意したり、それぞれの職員が危険と感じた場合には声を出し全体で安全に留意していくようにする。使用したトランポリンは足が引っ掛かる可能性があり危険と判断し処分する。他の遊具も含め安全に遊べるか確認していく。
- ②職員配置についても、職員全体で適切であるか確認していきながら、声を出し合っていく。

[園長意見]

ホールでのトランポリン遊びは日常的に行っていたが、危険予測が足りず大きな怪我につながってしまった。マットの枚数や、トランポリンの形状に気づいている職員は多かったが、声に出して改善するところまで至らず残念であった。任用職員も含め、日ごろからの安全点検や危険予測意識の向上など園全体で見直し改善していきたい。

～看護師のコメント～

これは、転倒して口元をぶつけ、歯牙が埋入してしまった事例です。歯をぶつけてしまった場合、受傷部位、状況を確認し、速やかに受診します。今

回は、歯が埋入してしまいましたが、脱落してしまった場合は、歯を保存液に入れ病院を受診します。

本事例では、診察後に保護者が病院に到着しました。その場合は、病院に状況を伝え、医師から直接、診察内容が聞けるように調整しましょう。また保育園での怪我は、保護者不在の状況で起こるため、不安を感じる保護者・園児も少なくありません。受傷した状況や受診内容は、しっかりと伝えることが大切です。この事例のように、違う病院で再度診察してもらうことも、対応として必要な時もあります。

